

▼教育方針「教えないで教えよう」

主語を「彼ら・誰か」ではなく「私・私たち」として問題発見・解決に取り組む機会を提供します。

▽1. 脱・管理

主語を「彼ら・誰か」として、問題発見・解決に取り組むことがないように、できる限り管理を減らします。

脱・管理のために、以下のⅠ～Ⅲに取り組めます。

- Ⅰ. 信頼関係の構築
- Ⅱ. 共通認識の形成 (feedforward)
- Ⅲ. 問題発見・解決を調整するための情報共有 (feedback)

■1.1 「Ⅰ. 信頼関係の構築」

信頼によって関係を構築することを目指します。

□1.1.1 信頼

信頼とは「ありのままの姿を受け入れ、相手の可能性を信じること」です。

□1.1.2 関係

関係とは「人と人との結びつき方」です。

例：
共同 / 分業 / 互助 / 交換 / 上下 / 競争 / 模倣 / 信頼 など

□1.1.3 構築手段

例：
空間共有 / 情報共有 / 約束 / 契約 / コミュニケーション など

■1.2 「Ⅱ. 共通認識の形成 (feedforward)」

支配・操作を避けるために、問題発見の際に必要な情報を事前に共有します。

□1.2.1 共通認識

共通認識とは「同じテーマについての、複数人による類似の解釈・理解 (認識)」です。

□1.2.2 形成手段

例：
文章, 画像, イラスト, 動画, 体験 など

■1.3 「Ⅲ. 問題解決を調整するための情報共有 (feedback)」

問題解決の調整に必要な情報を共有します。

□1.3.1 調整

理想の状態に近づいている場合... 「1 → 10」
理想の状態から離れている場合... 「-1 → 0」
理想の状態 自体を見直す場合など... 「1 → a」

□1.3.2 情報共有手段

管理にならないように、必要最低限の情報共有に留めます。

例：
文章, 画像, イラスト, 動画, 言葉, 行動, 態度 など

▽2. 配慮 (coordinate)

主語を「私・私たち」として、問題発見・解決に取り組みやすいように、配慮します。

配慮のために、以下のⅠ～Ⅲに取り組めます。

- Ⅰ. 「"ひとりでできること" / "みんなとならできること" / "できないこと"」の境界を見さだめる
- Ⅱ. 「"ひとりでできること"」にひとりで取り組みやすいようにヒト・モノ・コト (環境) を調整する
- Ⅲ. 「"みんなとならできること"」のみに関わり、境界を広げる

■2.1 「Ⅰ. 『"ひとりでできること" / "みんなとならできること" / "できないこと"』の境界を見さだめる」

「"ひとりでできること" / "みんなとならできること" / "できないこと"」の判断は、子どもに任せます。

□2.1.1 観察 (watch + image)

対象を "ありのまま" に受け入れ、どのように世界を解釈・理解 (認識) しているかを想像します。

□2.1.2 質問

質問をして、観察の結果を修正します。

管理については[こちらの資料](#)の「■1.2」

「〇〇をしてくれるから信じる」などの条件付きである「信用」とは異なります。

「先生 - 生徒 / 店員 - お客さん」のような上下の関係や、評価を通じた競争関係をつくらないようにします。

脱・管理という文脈での「同じテーマ」は問題発見・解決における「理想の状態を定義」となります。

「褒める・叱る」のような操作を避けま

"かまってちゃん" や "アウトソーシング" は適宜判断して対応しましょう。

■ 2.2 「Ⅱ. 『"ひとりでできること"』 にひとりで取り組みやすいようにヒト・モノ・コト (環境) を調整する」

環境はひとの言動に多くの影響を与えるため、主語を「私・私たち」として問題発見・解決に取り組みやすい (個人が、集中・忍耐を発揮しやすい) 環境を目指します。

□ 2.2.1 ヒト・モノ・コト (環境)

例：
ヒト...スタッフ, 子ども, 保護者さん, 店主さん, お客さん, 見学の方
モノ...椅子, 机, 時計
コト...音, 温度, 湿度, 配置, 景色, 照明, 視線, 声, BGM

□ 2.2.2 調整

調整の際は、「この場所が図書館で、全員が社会人で在る場合、どのような言動が適切か？」を判断基準にします。

お手本として子どもが来る前に自学自習を開始することや「てらこやノート」を書いてもらうことは、子どもたちが集中・忍耐を発揮することにプラスの影響を与えることができます。

■ 2.3 「Ⅲ. 『"みんなとならできること"』 のみに関わり、境界を広げる」

□ 2.3.1 気配り

他のひとのことを考える。

□ 2.3.2 フェードアウト

いまは「"できないこと"」でも、経験を通じて「"みんなとならできること"」に変化します。また、「"みんなとならできること"」も「"ひとりでできること"」に変化することを考慮して関わります。

「問い」だけを共有してから席を離れるなど、「"よりそう"」ではなく「"ただよう"」を意識します。

(□ 2.3.3 対話)

▽ 3. 対話 (dialogue)

主語を「私たち」として、問題発見・解決に取り組む機会として、対話を行います。

対話のために、以下のⅠ～Ⅲに取り組みます。

- Ⅰ. みる、きく : 自分の考えを形成する ...準備
- Ⅱ. いう : 自分の考えを表現する ...準備
- Ⅲ. みる、きく、いう : 相手の考えと自分の考えを重ねる...対話

■ 3.1 「Ⅰ. みる、きく...自分の考えを形成する」 ...準備

□ 3.1.0 自分の考え

自分の考えとは「『私』が体験の中で身につけた知識で、状況に合わせて使ったり、修正したりすることができるもの」です。

□ 3.1.1 形成

自分の考えは「みたい、みよう、みる」と「ききたい、きこう、きく」を繰り返す中で形成されます。

■ 3.2 「Ⅱ. いう...自分の考えを表現する」 ...準備

例：
文章, 画像, イラスト, 動画, 言葉, 態度 など

■ 3.3 「Ⅲ. みる、きく、いう...相手の考えと自分の考えを重ねる」 ...対話

以下のA～Cを制限時間まで繰り返します。

- A : みる... 「相手の考え」を受け入れ、相手がどのように世界を理解・解釈 (認識) しているのかを体験
- B : きく... 体験の中で感じたことで、もっと詳しく知りたいことについて質問
- C : いう... 「みる、きく」を通して変化した自分の考えを表現

▽ 10. 備考：言語行為

(対話について理解するために、)
言語行為の「おしゃべり / 教授 / 議論 / 対話」について、以下の方法で比較します。

- 目的：？
- ① 相手：特定 or 不特定※
- ② やり取り：双方向 or 一方向
- ③ 考え：重ねる or 伝える

※
特定...相手のことを理解している
不特定...していない

■ 10.1 おしゃべり (chat)

- 目的：仲良くなる・心理的な安全の確保
- ① 不特定
- ② 双方向
- ③ 重ねる

・集中

取り組んでいる問題解決以外を、意識的に「みない・きかない・いわない」ようにすること

・忍耐

取り組んでいる問題解決について、「みる・きく・いう」を継続すること

・お手本

こころの働きが「みる、きく、いう」になっているヒト

・てらこやノート

1. こんなことを学びます

問題発見における「理想の状態を定義」です。

2. 今日のすこし方

休憩の仕方も自分で決めます。

科目ごとに「振り返り」を一緒にする約束をします。

3. こんなことを学んだよ

"やったこと"ではなく、解釈・理解 (認識) の変化を書きます。

4. 次までに頑張ること

その日の学びを踏まえて、家庭や学校で取り組むことを書きます。

「みる、きく、いう」の順番が大事です。

最小限：おしゃべり・教授
非推奨：議論
推奨：対話

■ 10.2 教授 (teaching)

目的：知識の共有

- ① 不特定
- ② 一方向
- ③ 伝える

■ 10.3 議論 (discussion)

目的：白黒つける

- ① 特定
- ② 双方向
- ③ 伝える

■ 10.4 対話 (dialogue)

目的：新しい景色から得られる発見を楽しむ

- ① 特定
- ② 双方向
- ③ 重ねる